

「買い物依存症」における要因とその本質に関する一考察

碓 朋 子

要 旨

近年様々な「依存症」が社会的問題となっているが、本稿ではそのような「依存症」の中でも消費行動と特に強く関連している依存症の一つである「買い物依存症」について、「依存症」に関わる重要な仮説の簡単なレビューを交えつつ、主にその発症や深刻化のメカニズムにおける要因やその本質に関して議論した。そこにおいては主に現時点で「買い物依存症」に対して説明力が高いと考えられる「信頼障害仮説」の有効性について論じた。さらには今後の「買い物依存症」に関する研究の焦点の一つとして、消費行動としてのその「手段性」や「自己目的性」の検討の必要性も指摘した。

[キーワード] 「買い物依存症」「消費」「信頼障害仮説」

1. はじめに

近年わが国においても「買い物依存症」を含め様々な「依存」あるいは「依存症」に対する社会的注目があらためて高まっている（後藤, 2016）。例えば女性の「SNS依存」、若者の「スマホ依存」や「ネット依存」、児童生徒の「エナジードリンク依存」現象（例えば『週刊朝日』2016/08/30号記事）などはマスメディアやSNS等の媒体上でもしばしば話題にあがっている。また例えば毎日新聞2017年4月30日記事にあるように、政府の規制緩和政策とからんで「カジノ特区」がギャンブル依存者へ与える影響やあるべき対策などが議論にもなっている。

現時点では「依存症」にはその依存する対象によってその主たる要因や経過などには異なる

様相が想定されているものの、いずれの依存症でも全く何の対策もせずにとだ重症化していけば多くの場合、本人に対して生物学的ないしは医学的・心理的・社会経済的などの様々な側面において大きなダメージをもたらす可能性はもちろん高い（例えば蒲生ら（2015））。買い物やギャンブル依存の場合であれば、クレジットカードや消費者金融のカードをクレジットカードのみならずキャッシング枠まで限度額ギリギリまで使用し家計が成り立たなくなっている自己破産、友人知人や家族など身近な他者へ嘘をついてまでの借金、それらの事実や風聞によって堅い職場であれば社員としての身分も怪しくなる場合がある。

あるいはアルコール依存や違法な物質への依存であれば、過剰なレベルで摂取した状況下で

それが露見したり人身事故などを犯してしまい犯罪者となったり、その上で度重なる周囲に対するハラスメント行為によって家族や知人などの関係性が絶たれることもよくある。またそのような周囲の親密な他者だけでなく、当該人物が関連する組織・集団などに対しても様々な側面で波及的に大きなダメージがありえることから、「依存症」に関してはわが国においても更なる研究の蓄積と社会的対策の促進が求められている（例えば斉藤ら（1995））。

本稿ではそのような「依存症」の中でも消費行動と特に強く関連している依存症の一つである「買い物依存症」について、先行研究の簡単なレビューを交えつつ、主にその発症や深刻化における要因やその本質に関して考察したい。なお消費行動において商品を買う行動は「買い物」「買物」「購買」などいくつかの用語が存在するが、今回取り上げるトピックに関しては「買い物」という表現が主流であるため本稿では大凡それで統一している。

2. 「依存症」と「買い物依存症」

「買い物依存症」に関する議論に入る前にまず、「依存症」とは何かについて、依存する対象などの観点から概説する。患者が依存する対象に関しては、「物質」と「行動」ないしは「過程」と呼ばれるものと大別して議論されることが多い。前者すなわち「物質」としては例えば、アルコール、ニコチン、カフェイン、ある種の刺激性が強い飲料、覚醒剤、処方薬を含めてのある種の内用外用薬物などがあげられる。さらにこの「物質」については、比較的「ハード」なものと比較的「ソフト」なものとを分類して考える立場もある。そして後者すなわち「行動」や「過程」としての依存対象としてよく話題になるものとしては例えば、ギャンブ

ル、恋愛、買い物、摂食、ネット上の課金制のゲーム、断捨離などがあげられる。

なお「依存」に近い意味で用いられる用語や概念はいくつか存在する。例えばアルコールなどの物質に対する依存に関しての言及でよく見られる「中毒」という言葉の他にも、「乱用」や「嗜癖」などである。このうち「依存」と「嗜癖」はほぼ同義で使われることが多いが、「依存」と「乱用」はICDとDSMでは定義が異なり、ICDでは「依存」は医学的概念であるが「乱用」は社会的、経済的、法的な広範の領域にまたがる社会的概念とされる（石垣, 2015）。小林（2016）は「依存症」という用語はどうしてもアルコールや薬物などの狭義の依存をさすようなニュアンスがあるとして、ギャンブルやインターネット、買い物、摂食障害など多様な「行動の依存症」まで含めた広範な依存症の行動全般を論じる際には「アディクション」という用語を用いる方が適切であろうとしている。ただし本稿ではいわゆる「依存症」の中から「買い物依存症」について主に論じるため、既に「買い物」という依存対象に関しては既に先行研究においても一般化（例えば福村（1999））しつつある「買い物依存症」という用語を用いている。

次に「買い物依存症」について症状や治療の現状などの概要を簡単に説明する。「買い物依存症」は世界的に見ると当初アメリカで注目されてからわが国でも徐々に話題になっていったが、その経過の中で国内外において著名人や一般人が自身の「買い物依存症」的心理・行動を「カミングアウト」的に吐露したエッセイや関連する良質な著作物も発行された。例えば西村優里氏の『買い物依存症OLの借金返済・貯蓄実践ノート』や作家の中村うさぎ氏の『ショッピングの女王』などである。また典型的事例の紹介も続々となされ話題となった。例えば精神

科医の齊藤学氏によって訳されたキャロリン・ウェッソン氏による『買い物しすぎる女たち』（2016）である。その他にももちろん、主には現実のクライアントや患者と向き合っている精神科医や臨床心理の専門家などによって、加えて消費者心理やマーケティング論などに携わる周辺分野の研究者からも多々の事例が報告されている。

それらの事例にも見られるように、「買い物依存症」の典型的な症状は、社会生活上において現実的に何らかの支障を来す程度にまで、すなわちある程度「異常」や「病的」とみなせる程度にまで過剰に買い物という行動にはまることである。家計のバランスを崩したり借金をしたり売春をしたり金を盗んだりしてまでも、「買い物」をしたいという衝動が抑えられない。時にはインモラルや違法なことに手を出させるほどのその抗いがたいその強烈な「買い物」衝動は、症状の悪化に伴って更に強度を増し頻繁になっていく。その衝動に身を委ね「買い物」をしているそのプロセスの真っ只中においては、彼ら・彼女らは強烈な快感を感じられるものの、ひとたびそのプロセスが終われば一転して自責の念や反省、後悔など、強烈なネガティブな感情に襲われることが多い。そして必ずしも彼ら・彼女らの買う商品は生活必需的な商品と言えないことが多く、むしろ多くの場合はブランド品の服やバッグ、化粧品、アクセサリーなど非必需的な商品である。多くの患者は買った商品に対する執着や愛着は非常に薄く、購入後すぐにクローゼットにしまったままになったり、捨ててしまったり、誰かにあげてしまったりといったケースが多い。

下記では廣松ら（2001）が報告した事例から抜粋する。本事例のみならずかなり多くの事例において、当該消費者が身近な他者に対してすら器用に頼ることができない対人的コミュニ

ケーション上の不器用さを有していること、そして健康的な形でそういった身近な他者との関係性を構築できることができるようになると買い物依存症からの回復を見せる傾向が伺える。

症例は31歳女性、小学校教諭。幼児期より文房具など特定の物にこだわる傾向にあった。教職に就いた頃より、バッグに固執するようになり、27歳時第1子出産後エスカレートし、購入後気に入らなくなると、リサイクルショップや質屋に持っていったが、次第に家計を圧迫し、ローンも膨大になっていった。また、外出時は気に入ったバッグでないと出かけられず、バッグ選びに1時間以上要することもあった。今回、友人の勧めにより1997年11月当院心療内科を受診。厳格な父親に嫌われないよう自己主張を控え、職場でも同僚との争いを避けるため極力自分の意見を抑えていた。また、夫婦関係では会話がな、家事への協力がないなど不満が募っていた。このため本人の面接に加え、家族面接を行い、問題点をオープンにするに従い、自己主張も可能となり、問題行動も軽減した。結語：両親、夫に対する愛情欲求不満から買い物依存症を発症した1例を経験した。

次に「買い物依存症」の典型的患者プロフィールと治療について概説する。上記の事例や下記の事例に見られるように、圧倒的に20代や30代などの若い女性に多く、家族関係に顕在的なないし潜在的に不安定要素を抱えている者が多い。またウツや不安障害などを並存して有している場合が多い。治療に当たってもそういった症状に効くとされる薬の投与や認知行動療法的なカウンセリング、当事者による自助会的コミュニティを基盤とした支えあいや交流が功を奏することがある。ここでも「買い物依存症」の根底に、親密であるべき他者との不安定

な人間関係や不器用なコミュニケーション・スタイル、それによる不安感を主要素とした心理・行動がありそうなのが示唆される。下記では内田ら（1999）が報告している事例から、家族歴や経過など、本稿に強く関係する箇所を中心に抜粋する。

症例：S. R. 29歳 女性、風俗嬢（ソープランド）

主訴：頭痛、いらいらして落ち着かない、不安感、ふるえ、性欲亢進、睡眠障害、買い物への衝動がとまらない

現病歴：平成10年6月ごろより、以前からある頭痛がひどくなる。寝つきが悪く、日中はいらいらしている。食欲も日中はない。動悸やしびれ孤独感などの症状もある。平成10年7月30日に来院。

既往歴：高校生くらいから情緒不安定だった。仕事をしている気にならないが、一人になると孤独感にさいなまれ身体が震えたりする。また神経性胃炎にも頻回に罹患していた。中・高生のときは自殺願望を生じることもあった。偏頭痛のため、クリアミンA (1T) とデパス (0. 5, 1T) を屯用し、ジヒデルゴット (3T, 3×n. d. E.) を服用していた。仕事のため、ピルを服用中。

家族歴：66歳の父親が脳溢血、胃がん。68歳の母親の家系には、偏頭痛が多い。4人姉妹の末っ子であったが、2、3番目の姉は、障害児で生後1歳までに死亡した。

----- (中略) -----

経過と考察：頭痛を主症状とするうつ病の背景のもとに、情緒不安定で、孤独感が強く1人であることができない。仕事のときは大丈夫なのだが、気が緩むと体が震える。入眠障害もあるが今は昼間も眠れない。日中はいらいらしており、食欲もない。食事は人と一緒にあれば食べ

られる。性的欲求が非常に強い。突然の動機、不安感、しびれ感等も生じる。買い物への衝動が強く、とくに高価な洋服を買い込んでしまう。うつ病、パニック障害を背景とする買い物依存症の診断のもとに処方 (1) を開始した。以後、診察の際に20分から30分のカウンセリングも平行して行った。判断力の弱い自我に気づきを得て、買い物への衝動が抑制され、薬物療法の効果により他の身体症状は3ヶ月程度で回復した。症状の推移よりうつ病とパニック障害のcomorbidityも推定された。家族背景より、愛情に満たされない幼児期にもとづくうつ病の発症は、思春期に始まると推定され、長期の経過の上にパニック障害が発症しているとも考えられる。

3. 「買い物依存症」に関わる仮説

ここからは上記をふまえつつ、「買い物依存症」の要因や発症や重症化のメカニズムとして現在までに提唱されている主たる説について概説する。従来、「買い物依存症」を含め「依存症」全般も含めれば様々なモデルや仮説が提起され、どれもいまだ実証的にあるいは臨床的に圧倒的に支持されるというほどには至っていないようにも見えるが、いずれも経験的には相当の説得性を有しているものが多い。人が何かしらの対象に対して依存状態あるいは依存症を生じる機序の中で指摘される要因は多岐にわたる。少なくとも医学ないしは生物学的要因、心理学的要因、社会経済的要因などが複雑に絡み合った中で、依存形成のメカニズムが働いていることが示唆されている。例えばSadock & Sadock (2003) は物質依存に関する「薬理・行動的モデル」の中で、仕組みとしては対象薬物の正の強化作用からの薬物探索行動への流れをメインに据えた上で、前者へリンクする多幸的

なポジティブ感情や不安軽減などの行動的要因や、社会的状況・遺伝的要因・当該者の行動履歴などの調整的要因などを考慮している。

過去に淀(2001)では「買い物依存症」の要因や機序に関わる仮説として「自己確認仮説」という説を提起した。これは1990年代後半頃にマーケティング論や消費者行動論の領域において当時の学界を席卷した、消費を「快体験」として個人的な感情成分を重視しつつ「体験」として包括的に捉えようとするいわゆるポストモダンの先行研究の影響を受けつつ、買い物依存症における「買い物」という消費は果たして「快」なのだろうかという視座にたったものであった。残念ながら自らによる何かしらの実証や臨床を踏まえた議論ではなく、単なる理論的考察を経た小さな問題提起であり説得性が低いものではあったが、その問題意識は現在に至るまで繋がっている。ここでの主張の背景にあったのは、買い物に依存するという行動は、そういうビジネスライクな関係ですら構わないから何とか社会全体や何らかの集団や組織あるいは他者との関係性を結び自己をアイデンティファイすることによって「自己確認」しようとする、当該消費者の一つの人間的な営みなのではないかという自らの観察であった。

社会の中のネットワーク構成が複雑化したり過疎化や高齢化などの現象が進行する状況下で、それが社会的にいいか悪いかという価値判断とは別問題に現実として、旧来から存在する様々なコミュニティーの中には崩壊に向かっていくものも多い。例えば団塊の世代が大量に入居した集合団地の住民コミュニティー等は瓦解しつつある。また社会における価値観の変容、インフラとしてのネットやSNSの普及等にも助けられ、個人が心理的にあるいは物理的に所属している、あるいはできる集団や組織は多重化している。複数のSNS、例えばTwitterや

Facebook、Google+、Instagram等を使い分け、それらのSNS間で同一人物として特定されないように別人を装い、あるいは更にはある特定のSNS内において複数アカウントを保持し別人を装うことも容易である。そういった社会の変化により生きやすくなっている個人が多いだろうことは推察され、社会的なメリットも非常に大きい。

一方で自己をアイデンティファイしづらい状況下で、個人は「自分はこの集団や組織の一員である」と自らを一義的に定義することが困難になったという側面もあるのではないだろうか。上述の仮説はまだSNSの進展などはそれほど進行していない時代であったが、基本的にはそのような問題意識が背景にあった。すなわち他者や所属する集団・組織との関係性を結ぶことにおいてに何らかの困難さなり「不器用さ」を抱えている消費者が自己を心理的にアイデンティファイする一つの代替手段として「買い物」という行動に依存して「自己確認手段」として病的にしがみつくとによって「買い物依存症」になるのではないかという見解である。しかし当時から一方で臨床や実証を伴った堅実な先行研究からの知見では、「物質」に対する依存の一部と「買い物」などの「行動」ないしは「過程」に対する依存では、その経過や要因などにおいて、両者の重なり部分がありそうなのが指摘されていた。「自己確認仮説」では心理的・社会的要因しか考慮していないので、生物学的・医学的要因が強く働くと指摘されている前者のタイプに対する説明力はほとんどないと考えられ、深い再考が要されるものであった。

4. 「信頼障害仮説」

しかし「依存症」の領域において小林(2016)

によって提起された「信頼障害仮説」はそのような上述の問題をクリアする包括的で非常に注目すべき仮説と考えられる。この仮説は、依存症患者は「人」を信じられず、アルコールや薬物といった「物」やギャンブルや買い物といった「単独行動」しか信じられないと説明し、だからそれに依存すると考えている。つまり「買い物」を含めて上述のような対象に対して依存をする者には共通的な要因があるという示唆である。ギャンブルや買い物や恋愛などへの依存は一見すると「行動」に対する依存であって、他者を介した対人的コミュニケーションに見えるかもしれない、例えばアルコールやドラッグなどの物質に対する依存との共通する要因は薄く見えるかもしれない。そのように解釈してしまうと上記仮説が説明できる「依存症」の範囲が狭く見えてしまうが、それは早計である。

この仮説は小林（2016）が依存に悩む人々と臨床の現場での経験の中で、「依存」に対する従来の一般的な説明に対してのある種の違和感ないしは疑念を抱いたことから考察を重ね辿りついた仮説である。すなわち従来の一般的な「依存」に対する説明は、例えば当該人物が衝動的な性格であるとかアルコールや薬物といった物質に対する感受性の高さなど、ある種「依存」を発生しやすい遺伝子の組み合わせをある程度主たる前提として、「依存」が進行するに従って脳障害を起こすことによって更に悪化していくという説明が主流であった。しかし彼は現場での豊富な事例との対峙の中で、例え似たような条件の者であっても全てが「依存症」になるわけではなく、しかも一度「依存」を深めても深刻な状態までいたるまでにそこで踏みとどまったり回復したりする者がいることに気づく。この現象は例えば従来ヘロインなどの比較的ヘビーな薬物の依存症の説明において一定の支持を集めてきたカンツィアンら（2013）によ

るいわゆる「自己治療仮説」によっては説明が困難であると小林は考えた。また「物質」に対する依存や「行動」に対する依存の併発、特に前者に関しては「ソフト」なものの、後者に関してはある程度単独で完結できるものであるが、それらの併発というところに何か別な強い要因の存在を感じたと考えられる。それが「信頼障害」である。

この説では、上記のような対象に対する依存に陥りやすい者には、生育の過程でそれが明白のか暗黙のかにはかかわらず何らかのある種の「生きづらさ」を抱えており、それが「依存」への原動力となると見ている。「明白な生きづらさ」とは例えば、親からの虐待であったり複雑な家族構成であったり学校での激烈ないじめであったりと、本来ならば心休ませられるべき家庭や学校に自らの居場所が見つからないという辛さであるとされる。そして「暗黙の生きづらさ」とは、そこまでの家庭機能不全や不登校状態などまでは至ってなくとも、例えば心理的に自らの価値観や行動様式を押しつけてくるいわゆる「毒親」が君臨する「いい子」の家庭などに見られるもので、子どもは自分の真の意思を曲げてまでも表面上は親の言いなりになることによって何とか褒めてもらいたいとか愛してもらいたいと思い「過剰適応」することによって心中には結果的に鬱積した不満や不安を抱え込んでいく、そういった生きづらさであるとされる。

そして両方の「生きづらさ」とともに本質としては孤独感や無力感が存在し、それが何らかの依存へ向かわせると考える。「買い物依存症」に関して言えば、上記の説では、例えば買い物場面で出会う他者であるリアル店舗の店員やネットショップ上の店員、あるいはSNSや風俗店などの疑似恋愛場面で出会う相手は、必ずしも相互に本音を開示してくれるコミュニーショ

ン対象者ではないことが多いことから、こういう場面での「他者」は「自分の欲求を満足させるための手段や道具にすぎないのである」と喝破している。換言すれば買い物依存の消費者にとっては、店員や常連客などとの対人的コミュニケーションは、例えば店舗に置かれたPOPや商品自体などの「物質」と同程度の機能しか持たない可能性があるということである。この仮説は過去に提起された仮説、例えば碓（2001）と比較すると特に、いわゆる「物質」に対する依存と「買い物」などのある種の「行動」に対する依存とを併せて無理なく包括的に説明しうる理論的な枠組みが提供されたという点で画期的であると考えられる。その上、実際に臨床の場面で様々な患者と対峙する中で提示された仮説であり、同書の中で豊富に提示された臨床的事例や実証的検証もあいまって、もともと多分野にまたがりやすい当該トピックではあるが他分野に対する説得性も高いと考えられる。今後もし機会が与えられればこの仮説に関する実証的ないしは臨床的な研究を行ってみたいと考える。

5. 終わりに

他の「行動」依存も含め「買い物依存症」に対して有力な仮説が登場してきた一方で、このトピックに関していまだ未解明と考えられるのは、「買い物依存症」における「買い物」行動は果たして「手段的」消費なのか「自己目的」消費なのかという点である。もちろんこれら2つの側面は二律背反ではない。すなわち人間の社会的行動の一つとしての消費行動には、様々な要因が影響している。メディアとの接触行動などと同様、社会的行動としての消費行動には「手段的」側面と「自己目的」側面とがあり、実際の消費行動には両者の側面が程度の

差はあれ混在して見られることが多い。

例えばトイレットペーパーといったほとんどの消費者にとって日常生活に必要最低限な商品を購入する行動においては、多くの場合、排泄関連の生活領域において清潔で衛生的な人間的をおくるための手段として、その商品が買われ使用される。トイレットペーパーという商品自体を買う行動自体にはそれほどの楽しさや「快」は少ないかもしれない。しかし消費者は香りや柄、紙質などの様々な付加価値の部分の組み合わせにおいて多様な、市場に存在する多数の選択肢の中から自らの好みと照合し選択するという意味においての心理的・行動的楽しさを感じることもある。総合するとこの場合、「自己目的」側面も存在しえるが「手段的」側面が強く働くことが多い消費行動といえよう。

一方で消費者には「買い物」する行動自体が主たる目的であってそれ自体に「楽しみ」や「快」が存在する場合がある。例えばアウトレットを観光として訪れる、「銀ブラ」する、「ウィンドーショッピング」といった、生活のために必要な何らかの商品を買うのが主目的ではない「買い物」行動がその典型である。すなわちその行動の外部にある何らかの目的のための手段としてよりは、「買い物」という行動自体の内部に主たる目的が存在し、ある意味で自己完結している消費行動ともいえる。しかしもちろんこの場合でも、例えばそういった娯楽性にとんだ「買い物」の時空間やそれに伴う体験や感情を気の合う仲間や家族などと共有することによってその関係性を深めたいといった明示的あるいは暗黙的な目的が存在する場合も多い。その場合、「手段的」側面も有しつつの「自己目的」側面が強い消費行動といえるだろう。

ここで改めて「買い物依存症」における「買い物」行動において更なる探求の対象の1つと

なりうるのは、本質としてそこが果たして「手段的」側面と「自己目的的」側面がどの程度存在するのかという点ではなかろうか。「買い物依存症」においては「買い物」という行動自体に耽溺しているのだという従来からあった見解からすれば、極めて「自己目的的」消費といえる。しかし上述の小林（2016）によって提起された「信頼障害仮説」的な理論的見地に立ち「買い物依存症」の消費者にとっての「買い物」行動を見れば、その「買い物」に没頭している瞬間だけは「快」を伴っているように見えたとしても、本質的にはそれはまさに自らの明示的あるいは暗黙的な「生きづらさ」を埋め合わせるための手段でしかないのかもしれない。「買い物依存症」に関してそういった本質についても今後、更なる理論的・実証的・臨床的研究の蓄積が望まれると考える。

引用文献

- 碓 朋子（2001）「依存的消費：『消費』は果たして、単なる『快樂』なのか?…『買い物依存（症）』に対する『自己確認』仮説」流通情報（386）11-18.
- 石垣 琢磨（2015）「依存・嗜癖の理解と支援」『臨床心理学』（丹野義彦ら（編））有斐閣
- 内田 栄一・岡島 史佳・佐々木 ちひろ・村上 正人・桂 戴作・沖野 哲郎（1999）「心身医学療法が奏効したうつ病、パニック障害および買い物依存症を併発した性風俗嬢の一症例」産業衛生学雑誌 41（Special），672.
- Khantzian, E. J. & Albanese, M. J. (2009) "Understanding Addiction as Self Medication" Rowman & Littlefield Publishers. (エドワード・J・カンツィアン&マーク・J・アルバニーズ『人はなぜ依存症になるのか〜自己治療としてのアディクション〜』松本 俊彦（翻訳）（2013）星和書店）
- 蒲生 裕司・宮岡 等（2015）『こころの科学（182）〜依存と嗜癖〜』日本評論社
- キャロリン ウェッソン（1996）『買い物しすぎる女たち』（斉藤学（訳））講談社
- 後藤 恵（2016）「買い物依存症」（特集 今あらためて注目されている依存症について）『精神科 = Psychiatry』29（5），440-444.
- 小林 桜児（2016）『人を信じられない病〜信頼障害としてのアディクション〜』日本評論社
- 斉藤 学ら（1995）『こころの科学（59）〜依存と虐待〜』日本評論社
- Sadock, B. J., & Sadock, V. A. (eds.) (2003) "Kaplan & Sadock's synopsis of psychiatry: behavioral science / clinical psychiatry." (9th ed). Philadelphia:Lippincott Williams & Wilkins. (サドック, ベンジャミン J. & サドック, バージニア A.(編) 井上令一他（訳）(2004)『カプラン臨床精神医学テキスト第2版—DSM- IV-TR診断基準の臨床への展開』メディカル・サイエンス・インターナショナル)
- 中村 うさぎ（2001）『ショッピングの女王』文藝春秋
- 西村 優里（2014）『買い物依存症OLの借金返済・貯蓄実践ノート』合同出版
- 廣松 矩子・小林 伸行・林田 秀樹・林 ゆかり・橋本 恵子・杉本 篤史・松尾 雄三・高野 正博（2001）「愛情欲求の不充足感から買い物依存症を発症した1例」（第38回 日本心身医学会九州地方会 演題抄録）『心身医学』41(1), 77.
- 福村 愛美（1999）「購買行動と買い物依存症との関連性についての予備調査からの考察」大分県立芸術文化短期大学研究紀要 37, 163-171.
- 「中学生なのに『エナジードリンク依存』受験疲れて『金がある限り飲み続ける』」『週刊朝日』2016/08/30号
- 「ギャンブル依存 カジノ法成立受け対策強化 支援を模索」毎日新聞2017年 4月30日